

1 効果測定分析結果【小学校1・2年生「演劇ワークショップ」】

○児童生徒の非認知能力の調査、分析は、青山学院大学社会情報学部 学習コミュニティデザイン研究所が行う。(荻宿俊文教授、吉田葵助教)

(1) 調査目的

- **能動的**な演劇ワークショップを体験した児童が、その成果として、どのような資質・能力を伸長させるのかを明らかにすることを目的とする。

※本調査での「能動性」とは「**児童自らが主体的に判断し、積極的に活動すること**」である。

- 本調査は、演劇ワークショップと教科教育の授業の違いを「児童の**能動性**の違い」と捉えている。小学校の低学年の教科教育の授業の特徴として、学習のルールを学ぶ場面が多いなどにより受動的な状況が多いと考えられる。そこで、事前調査での教科教育の授業と事後調査での演劇ワークショップを比較することにより、演劇ワークショップ前後の変化をみる。

(2) 調査対象

①市内小学校1年生（22校、在籍人数561人）年3回実施

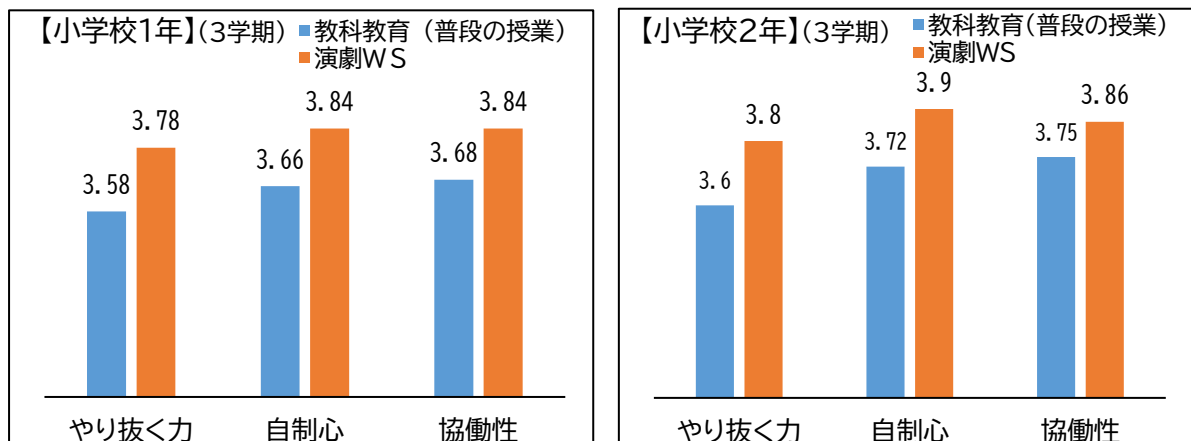
②市内小学校2年生（先行実施8校、在籍人数236人）年2回実施

(3) 調査方法

- 3つの調査項目「**やり抜く力(自己効力感)**」「**自制心**」「**協働性**」について、演劇ワークショップ前後の変容をみる。
- 事前調査…演劇ワークショップ実施前に「教科教育(国語・算数等)の授業中」を想定して回答
- 事後調査…演劇ワークショップ実施後に「演劇ワークショップの授業中」を想定して回答

(4) 調査結果

- 3つの調査項目の平均値の変化[事前・事後]



※回答方法は4件法(各項目に対して、4つの回答から、児童がその時の気持ちを振り返って選択した回答から、能動性に対して前向きかどうかを数値で表す。回答は紙面による。)

■ 調査結果と考察

- ◇ 小学校1・2年生ともに、「やり抜く力(自己効力感)」「自制心」「協働性」のすべての項目において、演劇ワークショップ後にプラスの変化があり、とりわけ「自制心」「やり抜く力(自己効力感)」が伸長している。

小1・小2に共通している特徴的な質問項目

やり抜く力（自己効力感）

○「友達の前で恥ずかしがらずに発表できる」…教科教育（普通の授業）において最もスコアが低く、演劇ワークショップとの差が最も大きい。

○「積極的に取り組める」…教科教育（普通の授業）と演劇ワークショップとの差が大きい。

自制心

○「嫌なことがあっても、友達に八つ当たりしない」…教科教育（普通の授業）において最もスコアが低く、演劇ワークショップとの差が最も大きい。

協働性

○「友達に自分の考えたことを話すことができる」…他の項目に比べてスコアが低い。

○「友達と協力することができる」「一人では難しいことでも、友達と一緒にやればできると思った」「皆で一緒にやり遂げることが好き」などの項目のスコアは高い。

2 効果測定分析結果【小学校6年生・中学校1年生「コミュニケーション授業」】

(1) 調査目的

- 本調査は、コミュニケーション授業と教科教育の授業の違いを「児童・生徒の能動性の違い」と捉え、**能動的**なコミュニケーション授業を体験した児童・生徒が、その成果として、どのような資質・能力を伸長させるのかを明らかにすることを目的とする。

(2) 調査対象

- ①市内小学校6年生（抽出校6校、在籍人数243人）年3回実施
- ②市内中学校1年生（抽出校3校、在籍人数241人）年3回実施

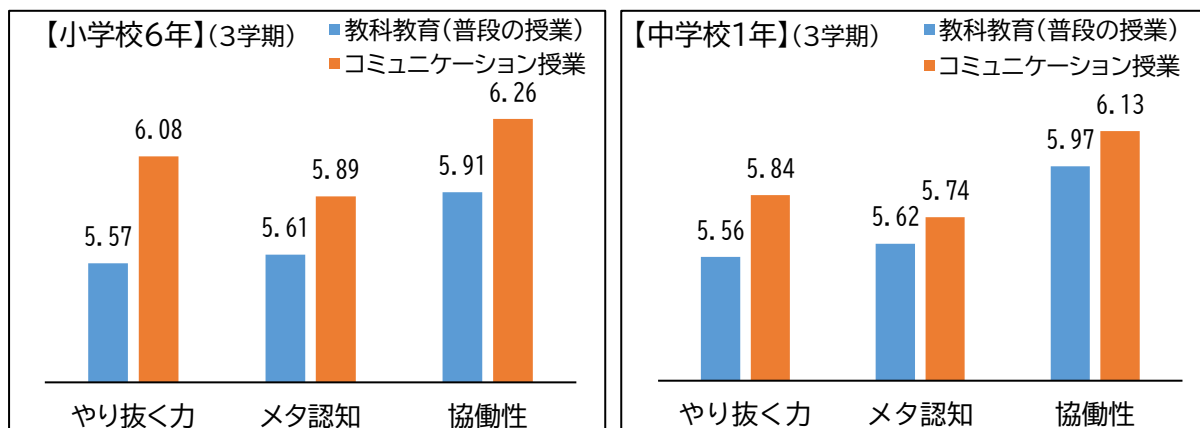
(3) 調査方法

- 3つの調査項目「**やり抜く力（自己効力感）**」「**メタ認知**」「**協働性**」について、コミュニケーション授業前後の変容をみる。

- 事前調査…コミュニケーション授業実施前に「教科教育の授業中」を想定して回答
- 事後調査…コミュニケーション授業実施後に「コミュニケーション授業中」を想定して回答

(4) 調査結果と考察

- 3つの調査項目の平均値の変化[事前・事後]



※回答方法は7件法(各項目に対して、7つの回答から、児童・生徒がその時の気持ちを振り返って選択した回答から、能動性に対して前向きかどうかを数値で表す。回答は Google フォームによる。)

■ 調査結果と考察

- ◇ 小6と中1のどちらも、「やり抜く力(自己効力感)」「メタ認知」「協働性」のすべての項目において、コミュニケーション授業後にプラスの変化があった。

小6の特徴的な質問項目

やり抜く力 (自己効力感)

- 「好きな科目がある」…この項目のスコアは右肩下がりになっている。

協働性

- 「グループで活動するときに、誰とでもいっしょに楽しむことができる(関係調整)」…教科教育(普通の授業)とコミュニケーション授業との差が大きい。

中1の特徴的な質問項目

メタ認知

- 「授業の初めにこれから何を学習しようとするのか、考えるようにしている」「授業の終わりに自分は何を学習したのか振り返るようにしている(自分自身によるメタ認知)」…教科教育(普通の授業)とコミュニケーション授業との差が大きい。

協働性

- 「一人でやるよりも、友達と協力した方がいい結果を生むと思う(協働期待感)」
…教科教育(普通の授業)とコミュニケーション授業ともにすべての期間を通してスコアが高い。
- 「友達の意見をもとに、さらに新しいやり方や考え方を作り出そうとしている(他者理解)」
…教科教育(普通の授業)とコミュニケーション授業との差が大きい。

小6・中1に共通している特徴的な質問項目

やり抜く力 (自己効力感)

- 「友達の前で恥ずかしがらずに発表できる(自己表現)」「自分が立てた計画は、うまくできる自信がある(主体性)」…この二つの項目のスコアは低く、教科教育(普通の授業)とコミュニケーション授業との差が大きい。

3 検証会議での意見交換

〔豊岡市教育委員会〕

授業中に不規則発言をしたり混乱させたりする児童が在籍するクラスで、講師によるコミュニケーション授業を参観した。コミュニケーション授業、演劇ワークショップは学びに向かいにくい子どもたちにとって効果があると感じた。

その授業では、ペアのグループ二組で時間がたっても子どもたちは動こうとしないが、指導者は一向に介入しようとはしない。途中で「やめたい、投げ出したい」といった言動を経て、最後にチラチラと助けを求めるサインを出したタイミングを見逃さず指導者が介入した。指導者は、シナリオや劇をうまく作るためのアドバイスではなく、ペアグループの二人をつなげることに徹して、なんとかやり遂げることができた。発表前に、講師がうまく発表するコツを説明したときに、クラスの全員が一斉に顔を向け指導者の言葉に集中した。授業開始時の表情と大きく変わっていた。

どの子もうまくやりたい、良いパフォーマンスがしたい、褒められたい、よくなりたいという思いがあるということが、教科指導ではわからないが、コミュニケーション授業でははっきり見るこ

とができた。そのグループは、振り返りに「最後までできてよかったと思う」と書いていた。子どもたちは、うまくいかないことはいっぱいあるが、うまくしたいと思っている。文部科学省は「だれ一人取り残さない学びの保障」と言っているが、その可能性がこのコミュニケーション授業やワークショップにあるのではないか。来年度は、演劇ワークショップをすべての小学校2年生に広げる予定だ。

【ファシリテーター】

来年度の小学校2年生の全校実施をみこして、いくつかの学校でワークショップを2回行った。2年間継続してワークショップをやることで子どもたちにどのような成長や学びがあるか、どういうタイミングで何をやれば一番効果があるのかというのを考えながら行った。

プログラムの内容や実施時期を学校や子どもによって変えた方がよいと考え、事前に作ったものを実践する中で変更していった。このようにより良い方法を考え、見つけながら実践する機会を与えていただいたことに感謝している。

小学校1年生から2年生まで継続してやった方が、子どもの成長、非認知能力の向上について非常に大きな効果があると実際にやってみて感じている。小学校1年生でやってきたことが、子どもの発達段階と合わせて小学校2年生で伸びると体感している。

【芸術文化観光専門職大学】

多くの現場に参加させてもらったが、何回見ても新鮮で学ぶところの多い時間であった。

ワークショップのプログラム自体はすでに決まっているものだが、子どもたちの様子は、学校ごとクラスごとで全く違う。それに合わせながらワークショップの内容や進め方、ファシリテーションがどんどん変わっていくのを見ることができてよかった。3つの非認知能力の資質能力があるが、「やり抜く力」はこういう形であられるんだ。「自己効力感」では、「何ができるようになった」という意識を子どもたちにこのように手渡しているんだというような場面をたくさん見ることができた。

【ファシリテーター】

他の市町が豊岡市のやっている非認知能力向上事業やコミュニケーション教育について興味を持ち、全校実施を行っているところもあるが、このように効果測定の調査もやっているところは聞いたことはない。調査結果を共有させてもらうのは貴重な時間である。豊岡市は大学もあり演劇教育に興味のある学生も多いので、河畔劇場としては、ファシリテーターを増やすこと、養成していくことは重要なことだと認識している。

【ファシリテーター】

自分がワークショップで行ったことを調査結果として見つめることができた。教員アンケートで自制心の結果が子どもたちのアンケートとギャップがあったことが興味深い。今年、現場で思ったことで、学校の教科で習ったことをワークショップで生かしている子どもたちがいるのを顕著に感じている。授業でやったことをワークショップの創作になかに生かすなど相乗効果が生まれているのかなと感じた。

小学校6年生、中学校1年生のアンケートの結果の中で、振り返りで何を学んだのかを振り返った時、あまり認識されていないという結果があり興味深い。ワークショップでどういうことを学んだのかということが意識的ではなく、無意識の中で楽しかったとか感情として残っているのだなど、自分が携わっている小学校1年生もそうなのかなと想像しながら聞いていて興味深かった。

〔青山学院大学〕

今自分が何を学んでいるのか、非認知能力とかコミュニケーション能力という資質に影響すること、学校では道徳教育の中で考えることなど、相手がどういうことをやってそれに対して自分が何ができるのかというようなところを見ていきたいと考えていたので、ご指摘の通りだと思う。

学校の先生方もワークショップから学ぼうとしているので、子どもの見取りとか場づくりという意味で、先生方にも情報を提供していければいいと思っている。演劇ワークショップでやったようなことを授業でやっていけるように広げていければいいと思う。

〔豊岡市教育委員会〕

学級によって子どもたちの様子も違うし担任との関係も違う中で、プログラムを変えてチャレンジしていただいたと聞いている。プログラムはカリキュラムであり、子どもたちの状況に合わせて更新すべきものだからブラッシュアップしていただけたらありがたい。

学びの中に入っていない子が、ワークショップの前後でどう変わったのか。個を追いかけるといふか、調査項目で、「あまり思わない」「思わない」と答えた子がワークショップをすることによって変化があるのかどうか、どんな時にその変化が起こっているのかということが分かれば教科教育でも役に立つ。社会的な背景、発達特性、あるいは何らかの困難を抱えていてうまくいかない子がワークショップを経てどう変わったのかということが今後の我々の視点なのかと思う。文部科学省は、だれ一人取り残されないと言っているのだと思うし、このような点をこれらかも検討してもらいたい。